

が、對になつて中央の泉水を圍んでゐる。其水は、人間、獅子、象、牛の四個の首が龍口になつて、四個の小祠の下へ流れてゐたのである。之は、ヒマラヤ山中の有名なアナヴタプタ Anavatapta 湖を想像するに足る。アジアの四大河は、之に比すべき口から流れるものと見做されてゐるのである。更に中央小祠に於ける如く四小祠にも、ローケーシュヴラの像が何れにもあり、其の右手の下に、よく二人物を見るが、一人は、麻痺性の者の如く、之が治癒を求めに來た様に匍つてゐる、他の一人は、已に平癒した者の様で立つてゐる。之で見れば、此の泉水には、治療の功德があるとせられ、而して、ローケーシュヴラはこゝで、支那日本に於ける藥師の如き役目になつてゐる療病の護神を現はしてゐる事を考へるのである。然し、恐く最も意味のある発見といへば、後足で立つてゐる大馬に澤山人間が纏ひ附いてゐるものを得た事である。此の話は、佛教を研究するもの、よく知つてゐる所で、印度美術にも現はれてゐる。例へば、アヂヤンターにもある。往古、セイロン島に怖しい鬼女が棲んでゐるが、其の殘忍非道を優しい外貌で隠してゐて、沿岸で難船した者を